

# 「国語科」と「総合的な学習の時間」の関連についての実践研究

－「話す力」の定着をめざした授業づくり－

M10EP004

加藤 克人

## 1. 問題と目的

### 1-1. 「総合的な学習の時間」と「国語科」との関連

平成20年1月の中央教育審議会の答申において、「総合的な学習の時間」の課題と対応策が、次のように指摘された。

1つ目の課題として、大きな成果を上げている学校がある一方、当初の趣旨・理念が必ずしも十分に達成されていない状況も見られること、また、小学校と中学校とで同様の学習活動を行うなど、学校種間の取り組みの重複も見られることが挙げられた。そこで、対策として、ねらいを明確化するとともに、子どもたちに育てたい力（身に付けさせたい力）や学習活動の示し方について検討する必要性が示された。

2つ目の課題としては、補充学習のような専ら特定の教科の知識・技能の習得を図る教育が行われたり、運動会の準備などと混同された実践が行われたりしている例も見られることがある。そこから、関連する教科内容との関係の整理、中学校の選択教科との関係の整理、特別活動との関係の整理を行う必要性が指摘されている。

「総合的な学習の時間」と各教科のかかわりを図ることは大切である。各教科で身に付けた知識や技能等を「総合的な学習の時間」において活用することによって、知識や技能等はより確かなものになり一層生きて働くようになる。また、「総合的な学習の時間」での学習活動やその成果が、各教科の学習活動のモチベーションを高めたり促進したりする。したがって、「総合的な学習の時間」と各教科との関連を意識した学習活動を工夫することが学習指導上特に大切となる。

これを「国語科」で考えてみると、基本的に

は、「国語科」で指導した知識や技能等が「総合的な学習の時間」において、実際に働く場として活用されることで、定着がなされることが期待される。話し合いを例にとってみると、話し合いの仕方という知識や技能等を重視したものを国語の授業で行う。それを受けて、総合的な学習の時間では、話し合われるべき内容の解決や深化や共通認識に重点をおいた授業を展開するのである。

本研究においては、「国語科」で指導した基本的な知識や技能等を「総合的な学習の時間」において活用することでより確かな力として定着することをめざした授業実践を行い、「総合的な学習の時間」と「国語科」との関連について考察したい。

### 1-2. 北中学校における「総合的な学習の時間」：環境教育

3年間を通じて、北中学校で「総合的な学習の時間」に取り上げられている題材は、「環境」に関わるものが多い。北中学校の特色の一つである「学校林活動」や「さつまいも栽培」「しいたけ栽培」などである。

「学校林活動」は、学校林を学習の場とした春・秋の年2回の活動である。学校林は、1952年5月に2002年5月末までの50年契約で、国有林から部分林設定されたものが始まりである。しかし、年月は経過し学校林の存在も忘れ去られたような状態だった。それを、2002年3月、ちょうど50年の契約期限を迎えるにあたり、新たに30年の契約延長とともに、関係諸機関の支援により総合的な体験学習の場として活用できるように整備した。同時に、2004年6月、関東森林管理局（山梨森林管理事務所）・甲府市・甲府市立北中学校の三者により協定を締結し、北

中学校林 1.98ha とその隣接地の国有林 6.79ha, 併せて, 8.77ha を, 「北中学校遊々の森」とし, 森林環境教育を継続的に進めていく場として設定した。

「さつまいも栽培」は, 学校の畑を使い, 6月の苗の植え付けから夏休みを含めた水やり・雑草取りを経て 11月に収穫, 12月に焼きいも大会を行う一連の学習である。

本研究では, 「総合的な学習の時間」の内容のうち, 北中学校の伝統とも言えるこれらの環境教育をとりあげ, 「国語科」との関わりについて検討する。

### 1-3. 「話す力」への着目：生徒の実態から

昨今, 子どもにつけるべき力として「伝え合う力」「対話力」が挙げられることが多い。新学習指導要領においても「伝え合う力を高める」ことが「国語科」の目標として初めて登場した。

「伝え合う力」とは, 新学習指導要領解説国語編において, 「人と人との関係の中で, 互いの立場や考えを尊重しながら, 言語を通して適切に表現したり的確に理解したりして, 円滑に相互伝達, 相互理解を進めていく能力のこと」と説明され, 表現と理解の能力を基盤とする総合的な言語能力と考えられている(瀬尾, 2003)。

今年度担任をしている学級の生徒(1年生)をみていて感じることは, 自分の意見をもっていても, それをクラス全体で発表することに消極的であることである。また, 話し合いとなると, とたんに無口になってしまう生徒が多いことである。これらは, 思春期にはいり, 他者の前で発言すること自体への恥じらいや, 他者とのかわりに必要以上の抵抗感を抱くという子どもの発達段階が関係していると考えられるが, 同時に, 生徒たちに現実の場面で「話す力」が育っていないのではないかと懸念された。

そこで, 本研究においては, 上記のような生徒の実態を受け, 「伝え合う力」の中でも, 「人と人との関係の中で, 互いの立場や考えを尊重しながら, 言語を通して適切に表現」すること, すなわち「スピーチ」に焦点をあてることとす

る。

## 1-4. 研究の目的

本研究は, 生徒につけたい力として, 「話す力」をとりあげ, 以下を目的とする。

「総合的な学習の時間」を活用しながら「国語科」で学んだ「話す力」を定着できるようなモデルを提案すること。

## 2. 研究の方法

本研究においては, 知識や技能等の指導は「国語科」で, 定着は「総合的な学習の時間」で行うことを基本的スタンスとしてワークシート・スピーチメモ等を用いながら, 表1に示した5回のスピーチの取り組みを行った。

## 3. 指導の実際

### 3-1. 「自己紹介」(国語科)

1) 実践の概要：小学校と中学校の生活を比較して感じた違いを必ず含めて, クラスの全体に向けて, 自己紹介を行った。スピーチメモは作らず, ノートに自己紹介の内容を記入してスピーチを行った。時間は1分間とした。

2) 成果と課題：入学して間もないこともあり, とても緊張していた。視線を上げることもなく, ノートばかり見ていて, スピーチに対する姿勢は消極的であった。内容はどれも似た内容で面白味に欠けた。1分間の時間を満たした生徒は少なく, 極端に短い生徒もいた。

### 3-2. 「発見したことを伝えよう～スピーチの会を開く～」(国語科)

1) 実践の概要：中学校に入学して気づいたことをクラス全体に向けて, スピーチを行った。スピーチメモを作成してスピーチを行った。時間は2分間とした。

2) 指導上の工夫：段階を踏んでの授業。ワークシートを用いて, 内容の充実をはかるため時間をかけて進める。自分の立てた目標が達成できたかどうか振り返る。

3) 成果と課題：内容を考える時間を多くとった

ので、充実とはいえないが、内容量は多くなる。  
2分間を満たす生徒が多かった。

今回はスピーチメモを用いた。スピーチメモはメモだから、原稿を書くのではないことを伝えたが、実際のスピーチではスピーチメモから目を離さずスピーチする生徒が多かった。また、練習する時間を授業の中でも取ったが、本番と練習のつながりが不十分であった。早口で、声が小さい生徒が多かった。

3つの小学校の出身者が集まった学級なので、それぞれ1/3の生徒は小学校の様子を知っている・中学校の様子は全員が知っているということで、話し手・聞き手のモチベーションは低いものであった。相手意識・目的意識の大切さを改めて実感した。

### 3-3. 「春の学校林活動を終えて、学校林活動を欠席した友人に、学校林のことを伝えるためのスピーチ」(総合的な学習の時間)

1) 実践の概要：春の学校林活動を終えて、学校林活動を欠席した友人に、学校林のことを伝えるために、1人1人が1分間スピーチを行った。スピーチメモを作らず、短時間でスピーチする内容を考え、その時間の中で、すぐにスピーチを実施する。じっくりと時間をかけて、内容を考え、スピーチメモを作り、練習する時間をかけて、スピーチをするという前回の国語科の取り組みとは違い、1時間の中で、スピーチの内容について示し、全員がスピーチをした。

2) 指導上の工夫：相手(学校林活動を欠席した友人)、目的(学校林のことを伝える)を明確にした。1時間の授業の中で、内容を考え、スピーチまでする形をとった。

3) 成果と課題：国語科の学習からスムーズに移

表1 5回のスピーチの特徴と目指すべき特徴

	①「自己紹介」	②「発見したことを伝えよう」	③「春の学校林活動を終えて」	④「本の紹介」	⑤「さつまいも学習を終えて」
教科領域	国語科	国語科	総合的な学習の時間	国語科	総合的な学習の時間
時期	4月	4月~5月	6月	8月~9月	12月
相手との関係	新しいクラスメイト	クラスメイト	学校林活動を欠席したクラスメイト	親しいクラスメイト	来年入学してくる後輩
目的	親しみを増す。	発見したことを知らせる。	学校林のことを知らせる。	本の内容を知らせる。	さつまいも学習の内容を知らせる。
語	少し改まったことば	平生のことば	平生のことば	平生のことば	改まったことば
話	筋道を立てて話す。	筋道を立ててわかりやすく話す。	筋道を立ててわかりやすく話す。	中心のはっきりした話をする。	中心のはっきりした話をする。
話	要点をつかんで話す。	特徴や要点をとらえて話す。	特徴や要点をとらえて話す。	特徴や要点をはっきり伝える工夫をして話す。	特徴や要点をはっきり伝える工夫をして話す。
指導事項	A領域アイ	A領域アイ		A領域イウ	

行することができた。相手（学校林活動を欠席した友人）、目的（学校林のことを伝える）が、生徒の実態と合致していたために、学校林の特徴や学校林での活動の内容をわかりやすくスピーチできた。また、体験に基づいた参加型の学校林活動を題材としたことがよいスピーチにつながった。

### 3-4. 「本の世界を広げよう」(国語科)

1) 実践の概要：2学期に入り、読書感想文（夏休みの課題）を題材として、クラスみんなに本の紹介をするスピーチを行った。全体ではなく、グループ発表を2回実施する。

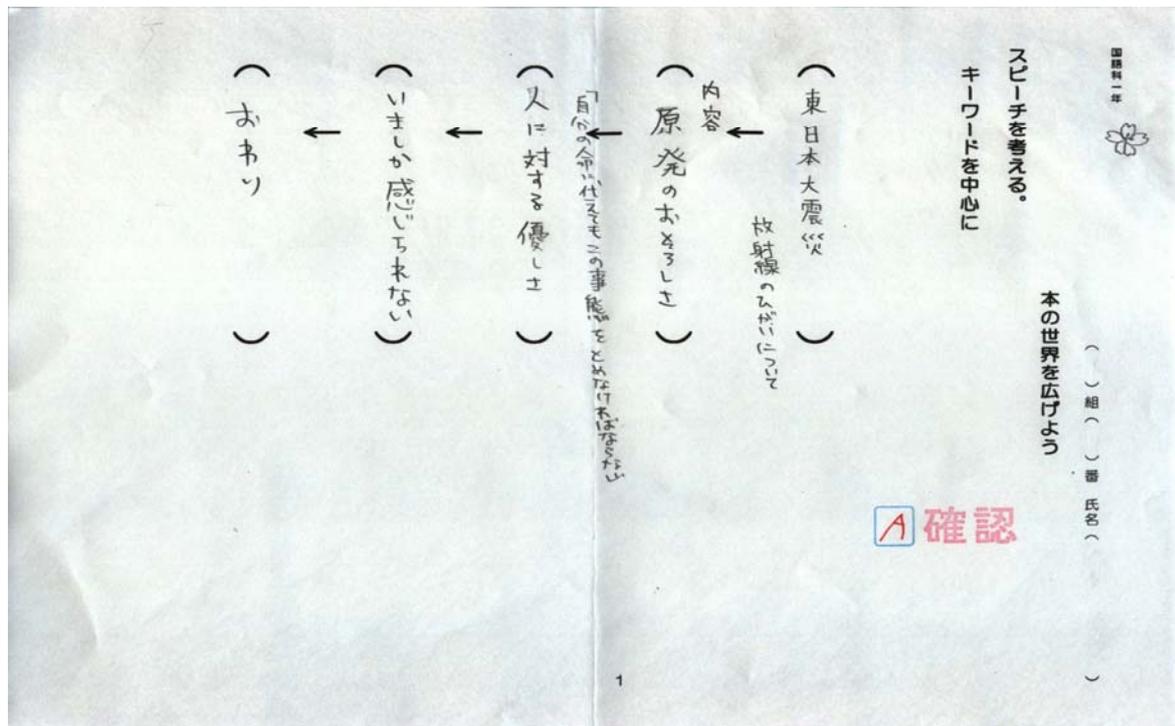
2) 指導上の工夫：全体での目標と個人の話し方の目標の設定を行った。全体での目標は、「聞いている人が、その本を読みたいと思うようなスピーチにする。」と「話し方の目標として聞いている人の方をみながら話す。」である。また、スピーチメモの工夫を行った。1回目は、「文章で書くのではなく、キーワードを中心に書く」ということで、用紙を配布して、スピーチメモの作成にかかったが、どうしても長いものにな

ってしまう。文章で書いてしまうものまであった。そこで、2回目は、「キーワード」だけ書くワークシートを使い、スピーチを行った。

3) 成果と課題：スピーチメモにキーワードのみを書くことにより話す姿勢が向上した。(スピーチメモ①)

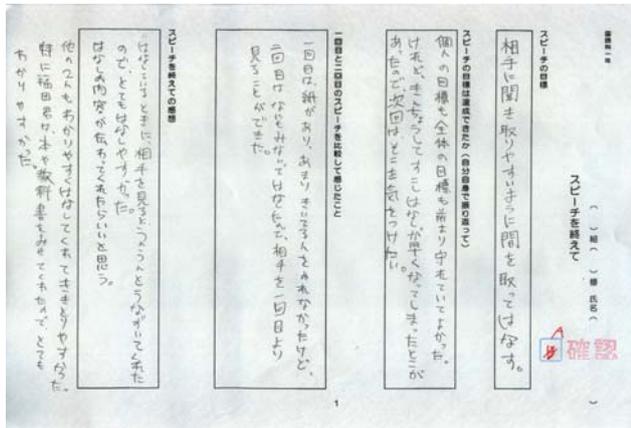
クラス全体でのスピーチではなく、4～5名のグループでのスピーチだったため、リラックスしてスピーチをすることができた。発達段階(中学1年生)として、少人数でのスピーチがプラスに働いた。夏休みの課題としてそれぞれが取り組んだ読書感想文だったので、内容については、どの生徒も充実していた。そのため、何を伝えていくのかから考えることができた。

生徒の感想①には「はなしているときに相手を見ると、うんうんとうなずいてくれたので、とてもはなしやすかった。はなしの内容が伝わってくれたらいいと思う」といった記述、生徒の感想②には「紙を見ないおかげで、みんなの顔もしっかりみれた」といった記述、生徒の感想③には「話をしているとき誰も見てくれないと『聞いていないんだな』と思ってし

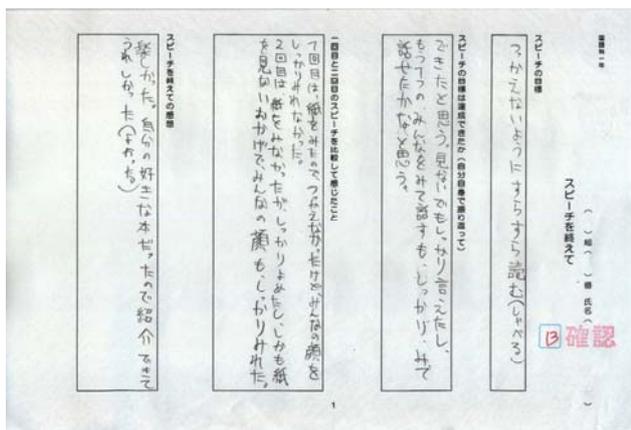


スピーチメモ①

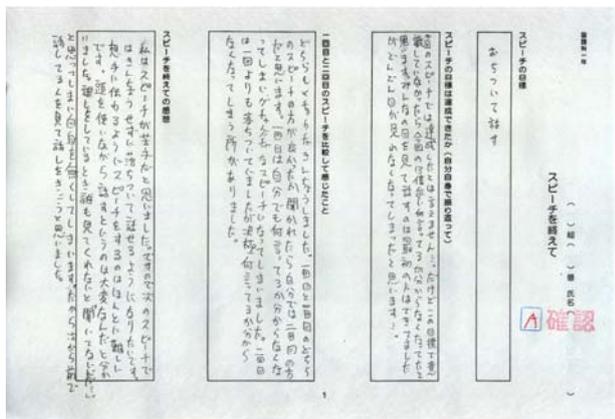
まい自信を失くしてしまいます。だから次から前で話している人を見て話をきこうと思いました」といった記述も見られ、スピーチにおいて聞き手を意識することができていることがうかがわれる。



生徒の感想①



生徒の感想②



生徒の感想③

### 3-5. 「さつまいも学習を終えてのスピーチ」(総合的な学習の時間)

こうした流れを経て12月に「総合的な学習の時間」でスピーチの授業を実施した。

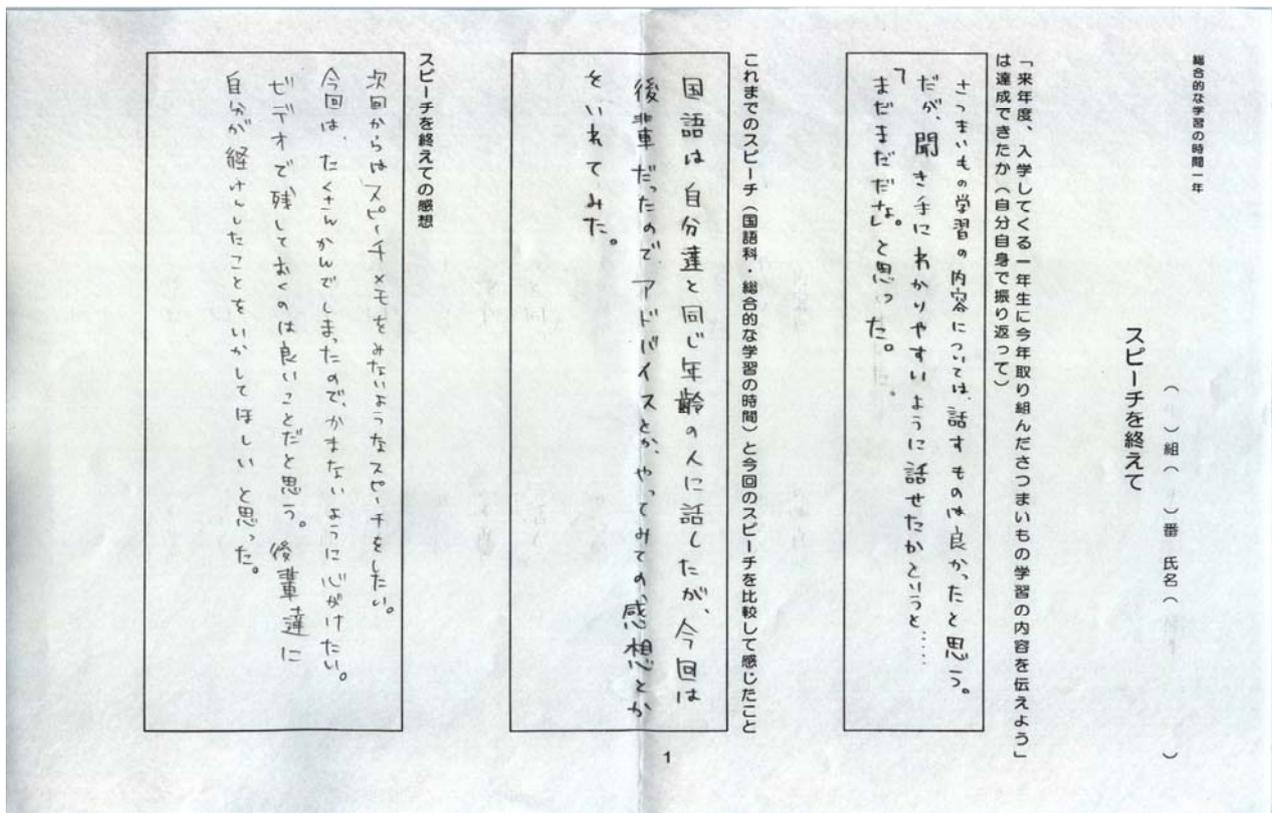
1) 実践の概要: 国語科の1年A領域(話すこと・聞くこと)の指導事項イ・ウを実際に試すものとした。国語科の授業で学んだ知識や技能等を総合的な学習の時間において活用することによって、知識や技能等を定着させようと考えた。

クラスの全員で、さつまいもの学習の流れをスピーチした。学習グループ(4人)で、苗を植える、水をやる、さつまいもについて調べたことを発表する、さつまいもを収穫する、焼きいも集会を開くの内容を分担した。そして、それぞれのグループで、分担した内容が重ならないようにスピーチの内容の検討を短時間で行った。

2) 指導上の工夫: 全員のスピーチを聞くことで、さつまいも学習の流れがわかるような構成とした。そのため、司会と全体の概要を説明する担当を置いた。

これまでのスピーチと違い、年下に向けてのスピーチの形をとった。

3) 成果と課題: 来年度入学してくる1年生に向けてのスピーチということで、実際にビデオテープをまわしての授業となった。生徒の感想④には「国語は自分達と同じ年齢の人に話したが、今回は、後輩だったのでアドバイスとか、やってみての感想とかをいれてみた」といった記述が見られ、年下である人に向けてのスピーチであることを意識して、話す速度や言葉の調子、間の取り方、相手にわかりやすい語句の選択、相手や場に応じた言葉遣いなどについての配慮ができていたことがわかる。



生徒の感想④

#### 4. 総合考察

「話すこと・聞くこと」に関する学習は、教科書では学期に1回程度しか配当されていない。そのため、生徒が学習事項を忘れてしまったり、スピーチの回数が不足したりすることにより、技術の定着が難しい状況である。そこで、生徒が目的をもって各回のスピーチに取り組むことができるようにすることと、スピーチの技術を効果的に定着させることをねらい、指導過程を工夫した。その結果として、技術の指導→スピーチ→技術の指導→スピーチという流れで、合計5回のスピーチを行う指導計画を作成した。作成の際には、スピーチに与える影響の大きさや難易度を考慮して指導事項を配列した。また、年間指導計画を見直し、スピーチの技術を集中して指導できるようにした。(2008 館山)

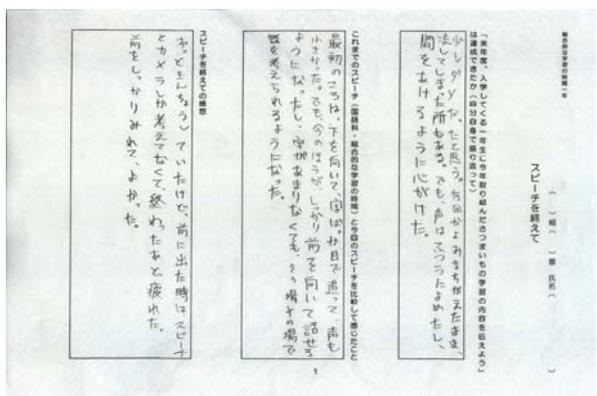
実践をする上で心がけたことは、基本的には、知識や技能等の指導は、国語科で・実際に働く場として活用し、定着させるのは総合的な学習

の時間でということである。

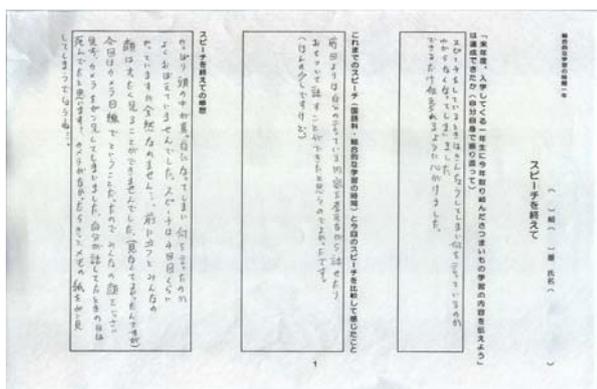
5回の授業(3回は国語科、2回は総合的な学習の時間)を終えて、回数を重ねることに徐々にではあるが、よいスピーチができるようになってきた。特に、スピーチの仕方(話し方)面では顕著であった。スピーチの仕方(話し方)は、経験した回数があるをいう。一回一回のスピーチでどのような目標を意識的に持たせるか、目標を生徒の実態からどのように設定していくかに配慮し、数多く経験させることが定着につながる。そのことは、生徒の感想⑤「最初のころは、下を向いて、字ばかり目で追って、声も小さかった。でも、今のほうが、しっかり前を向いて話せるようになったし、字があまりなくても、その場その場で考えられるようになった」という記述、生徒の感想⑥「前回よりも自分の言っている内容を考えながら話せたり、おちついて話すことができたと思う」という記述が示

している。

内容面は、考える時間を多くとることによって充実してくるが、「春の学校林活動を終えて、学校林活動を欠席した友人に、学校林のことを伝えるためのスピーチ」では、考える時間は短かったが、「欠席したクラスメートに学校林活動のことを伝える」、「さつまいも学習を終えてのスピーチ」では、「来年度入学してくる新入生にさつまいも栽培のことを伝える」というように、何のために誰に対してかが明確になっていれば、必ずしも多くの時間が必要ではない。どのような題材を仕組むかが大切となる。



生徒の感想⑤



生徒の感想⑥

「総合的な学習の時間」の学習活動として、情報を集める、調べる、成果をまとめる、報告や発表・討論の場が設定され、話す・聞く、書く、読むといった能力が必要になってくる。これらはまさに国語科で大切にしなければならない言語活動であり、「総合的な学習の時間」と言

語能力の育成を目指す国語科との関連は大きいと言える。(幸, 2003)

国語科のそれぞれの領域・事項には、数多くの言語活動が示されている。話すこと・聞くことの領域において、1年生の言語活動例として次のものが上げられている。「ア日常生活の中の話題について報告や紹介をしたり、それらを聞いて質問や助言をしたりすること。」「イ日常生活の中の話題について対話や討論などを行うこと。」具体的には、スピーチ・パネルディスカッション・ポスターセッション・ディベート・バズセッション・話し合いなど様々である。これらの多くは、総合的な学習の時間の中で、多く用いられている言語活動である。

「国語科で身に付けた知識や技能を生かし使ってみること」により初めて定着することもある。定着がより確かになることもある。生かし使ってみるためには実の場すなわち、実際の場面状況を設定して学習させることが求められている。このことを意識していくことが大切となる。

## 5. 今後の課題

多くの言語活動がある中で、スピーチを何度も取り上げた。これは、話す力の基礎はスピーチにあると考えたからだ。今後は、スピーチで培った力を基にして、プレゼンテーション力・話し合う力へとつなげていきたいと考えたからである。

話す力・聞く力の育成は、国語科、総合的な学習の時間においてだけではない。全ての教科・領域で育てていく力だと考えられる。今回は、その中で、総合的な学習の時間と国語科とのかかわりについて考えてみた。

今後の研究としては、「この学校の、この生徒たちに対して、この授業の、この場面で、自分が、このような工夫をしてみたら、生徒たちがこのように活動した」という実践の積み重ねと全教師の共通認識の構築という視点を大切にしながら、話す力・聞く力とつながりのある特別活動（学級活動）と総合的な学習の時間のかか

わり、特別活動（学級活動）と国語科のかかわりについて研究をすすめていきたい。

## 6. おわりに：実習の省察

国語科の「本の世界を広げよう」の授業の後に、総合的な学習の時間でスピーチの授業を実施しようと計画を立てていた。当初は、秋の学校林活動の後にと考えていたが、生徒の実態と合ったスピーチが設定できず、今回の「さつまいも学習を終えてのスピーチ」となった。あらためて、題材設定（相手意識・目的意識）の難しさを感じた。

これまでの教員生活を振り返って頭の中に浮かんでくる言葉は、「悪天の友」という言葉である。「悪点の友」とは、悪い天気すなわち悪い状況・気分が落ち込んでいる時・元気がない時に、ずっと手を差し伸べてくれる人・そっとかけられる優しい言葉を示す。元気な時・心が満たされている時には、たいていのつらいことを我慢することができるし、つらいことを必ずしもつらいとか不愉快だとはとらえずに、受け入れることができる。「心のゆとり」が、つらいことをうけとめさせるのである。けれど、反対に気分が落ち込んでいる時・元気がない時には、極めて耐性が弱くなるものだ。本当に辛い時、その雰囲気気づける人。がんばりすぎることをせず、悪いことを良いことと同じように受け止める姿勢が持てる人でありたい。山梨大学でのこの研修がそれに一步近づくものになったのではないかと考えている。

最後に、このような教職大学院での研修という貴重な機会を与えてくださった山梨県教育委員会、甲府市教育委員会、甲府市立北中学校の日野原校長先生をはじめ先生方、山梨大学の先生方に心から感謝申し上げます。

本当にありがとうございました。

## 参考・引用文献

中学校学習指導要領(平成20年9月)解説 ― 総合的な学習の時間編―

中学校学習指導要領(平成20年9月)解説 ― 国語編―

佐藤真(2008年)中学校新学習指導要領の展開 総合的な学習の時間編(明治図書)

河野庸介(2008年)中学校学習指導要領の展開 国語科編(明治図書)

文部科学省(2011年)今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開

大村はま(1991年)大村はま国語教室(筑摩書房)

舘山豊(2008年)自分の考えを分かりやすく話す力を育てるための指導法の研究 ―国語科に

おけるスピーチの系統的な指導を通して― 瀬尾学(2003年)総合的な学習を見すえた国語科の授業改善 ―「伝え合う力」を育てる教科としての国語科という視点から―

幸聖二郎(2003年)「総合的な学習の時間」と「国語科」との両輪で言葉の力をつける ―単元「やったぜ!下西!さつまいも!」(小学校第6学年)の実践を中心に